
 令和二年度社会福祉学研究科 修士論文要旨

親亡き後の知的障がい者の地域生活を見据えた親の準備プロセス

菅野 充

知的障がいのある子どもを持つ親は自身の高齢化に伴い、子どもの将来の生活に対する不安といった親亡き後の問題を抱え過ぎている。

本研究では、知的障がいのある子どもとその親が抱える将来への見えない不安の要因をとらえることで、親の立場から親の支援の可能性を検討し、将来に対する見通しや心構えを持つことができるような支援の知見を得ることを目的とした。具体的には、親元を離れ、グループホームを利用し生活する子どもの親7人にインタビュー調査を行った。特に、知的障がい者の自立生活としての居住支援を担うグループホームが、親亡き後の生活を考える際にはどのような位置づけを担っているのか、さらには、親亡き後の将来の見通しを持つうえでどのような影響があるのか、という点に着目しながら、子どものグループホーム移行のプロセスをふまえ、利用に至る要因や親役割の変容について分析を行った。

その結果、子どものグループホームへの生活移行のプロセスにおいて、子育てにおけるソーシャルサポート、グループホーム移行における個別性、グループホームに委ねる安心感と役割への期待、将来に対する見通しを持っていること、が確認できた。さらに、ロールモデルの必要性、親による役割も継続しながら子どもがグループホームを利用できる環境、安心した生活を支えるグループホームの安定経営、が求められる要件として見出された。しかしながら、グループホーム利用することが、親にとって生涯の安心を得ることにはつながらないことも明らかとなった。

知的障がい者の将来的な地域生活を見据えるためには、親による支援も踏まえたトータル的な支援体制を図りながら地域への自立した生活移行を進める必要性、さらには、親亡き後を見通すことができる将来の暮らしを支えるシステムの構築が求められるものと考えられる。

不安や悩みを抱える人に対する初期の気づきに関する研究 -低強度のネガティブ感情表出を対象として-

遠藤 仁

不安や悩みを抱える人への援助は他者の外見や周囲の状況から相手が問題を抱えている可能性を考慮する「気づき」から始まるが、現実の場面は常にそれらが明確に表出される状況のみではない。本研究は、見る側は他者の低強度のネガティブ感情表出を感知し共感的覚醒が生起することを気づきとし、その判断に影響を与える思考の枠組みと自覚状態が気づきを高める可能性を実験にて検証した。予備実験でダミー含め低表出強度ネガティブ感情を表情、姿勢、動作にて演技した刺激人物の映像を18映像作成した。本実験では大学生53名を操作群と統制群に分類し、予備実験で作成した映像を映写時間3秒で連続映写し、各映像に対し気になると感じた映像にチェックを付けることで共感的覚醒の生起の有無を確認した。操作群にのみ私的自覚状態を高める小さな鏡を左前方に配置し、映写前に内省目的のアンケートを行った。参加者は映像視聴後、チェックされた映像について“少し気になる程度：1点”から“非常に心配：5点”まで5件法で評定し判定理由を自由回答で記入した。最後にチェックされなかった映像の判断の理由を自由回答で聴取し、私的自覚状態の操作チェック実施後に実験終了とした。

操作チェックにて実験時私的自意識は両群で有意差を認めず自覚状態が気づきに及ぼす影響は検証できなかった。判断に影響した思考の調査のため評価映像に対し得られた583の自由回答を16項目にカテゴリー分類し、回答数10未満の3項目を除外した13項目に、年齢、他者意識尺度(内的、外的、空想的)、実験時の自意識尺度(私的、公的)、各演技の有無(表情、姿勢、動作)を加えた計22項目を独立変数、チェック有無を従属変数として二項ロジスティック回帰分析を行った。正の影響因子は表情の観察、動作の観察、心理の推測、年齢、動作の演技が、負の影響因子は場所の考慮、行動の推測、身体の推測、特性の推測、自身の体験、実験時私的自意識が抽出された。以上から初期の気づき時の見る側の認知の特徴、望ましい態度、期待される訓練方法の可能性について一定の示唆を得た。